継続検討事項（第3回海域WG後）

○　管理目標の取り扱い

WGでの議論

・ 計画として数値目標を挙げるのは当然だが、数値目標の設定が困難
・ 管理目標は普通に漁業を行っていれば満たされるが、なにも書かない訳にはいかない
・ 目標としては現状の生態系を維持するのが目標、判断基準は生態系を構成している指標を調査し判断する
・ 通常の変動の範囲内を設定し、指標を作るべき

事務局の考え方

・　但し、指標種に係る漁業についての管理目標は現行のルールに基づいて行っていることを踏まえ、それぞれの管理主体が行うべきものと考えている。

○　指標種選定の適否・生態系ピラミッドの取扱と構成要素

WGでの議論

・ 上位性に鯨類が入っていないのに疑問を感じる
・ 海鳥類が入っていないことに疑問を感じる
・ 陸域の生態系には上位・典型・特殊とする決め方はあるが、海域では疑問、むしろキーストンピーシーズを含めるべき
・ 海洋生態系の良い指標は、漁業自身にある。漁獲物の統計、体長組成等を上げれば良い指標となる
・ 海洋生態系に人間活動（漁業）を組み込んだ知床の生態系と考えたが、上位種にトドやアザラシが最上位に位置づけられる部分に違和感がある
・ 三角（ピラミッド）の概念は古い。食物網と言われている時代なので、それに則した方が良い
・ シロザケ、カラフトマスは河川の河口域に影響を及ぼす種。上流域に影響を与える種としてはオショロコマが重要。サクラマスについてはデータが無いということで外すのは問題

事務局の考え方

・当初の上位性・典型性・特殊性のクラス分けを止めて、生態ピラミッドに沿った構成要素の指標種を絞り込み、保護管理措置には絞り込んだ（キーストンピーシーズ）指

標種について記述することとした。その指標種の保護管理措置の中には漁業も入ることとなる。

・鯨類については、指標種としては位置づけないものの、モニタリングの対象種として対処する

・ また、人間活動（漁業）やレクリエーションは食物連鎖ピラミッドの外に置いた構図とした

・ サクラマスとオショロコマの重要性とそのモニタリングの実施について、必要があれば考え方の中で記述することは可能であるが、規制措置については困難

○　サケ科魚類管理計画（ふ化放流事業等）の扱い

（星野所長見解）

・ 推薦地内の管理計画の１つとして、サケ科魚類の管理計画が必要

・ その中には人工飼育稚魚の放流についての評価も含まれる

・ 海域WGではふ化放流事業そのものでなく、海域の漁業と海域の保全、両方の観点で検討している

・ 稚魚放流事業は、全国的な観点からはっきりしとした日本の考え方を明らかにし、それをベースに知床でも考えていく必要がある。

・ その観点からの記述が海域管理計画の中に盛り込まれるだろうし、その内容をサケ科魚類管理計画の中でも引用することになる

○　次回までのモニタリングの整理と役割分担

WGでの議論

・ ５年後の評価に答えられるモニタリングは最優先事項。

・ 漁業を海洋生態系の保護管理のもとに位置づけ、今後のモニタリングを整理する

事務局の考え方

現在、海域WGの関係者として知床で実施している調査研究及びモニタリングの一覧表を整理した

これをベースに今後必要なもの、継続して行うべきものなどを海域 WG で議論して頂きたい